様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：４４３０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５６０７９５

研究課題名（和文）近代の繊維工場における女子寄宿舎・家庭寮・教育施設の形成過程に関する建築史研究

研究課題名（英文）Historical Architecture Study of the Development of Women's Dormitories, "kateiryo" and Educational Facilities in Silk and Spinning Factories in the Modern Age

研究代表者
山田　智子（YAMADA, Tomoko）

京都文教短期大学・ライフデザイン学科・教授

研究者番号：６０３１０６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：　郡是製糸(株)では1925年頃女子寮舎の標準プランが確立されたが、1958年以降建設の女子寮舎の寮室には床の間がなく、収納棚が壁面一杯に造り付けられた。家庭寮の多くは1948年以降に建設され床の間をもっていた。寮舎内で起居を通して行われた「郡是教育」は、戦後の寮自治により寮舎外の家庭寮や教室へと場所を変えた。
　東洋紡績(株)では1922年には「自修寮」（家庭寮）が設置されていた。1929年の深夜業廃止に伴う余暇時間の増加により裁縫教室や割烹教室が充実した。1935年に工場付設の女学校が青年学校へ移行されると当時の良妻賢母主義教育と合致し、自修寮実習もさらに活発に行われた。

研究成果の概要（英文）：Gunze Silk Manufacturing established a standard plan for women's dormitories around 1925. The women's dormitories built after 1958 did not have "tokonoma" (alcoves) in the rooms and the closets were built on the walls. Most of the "kateiryo" (Home Economics Practice House) were built after 1948 and they had "tokonoma". So, "Gunze education" was performed inside of the dormitories through daily living, but it shifted to outside of the dormitories, managed autonomously by workers after the Second World War.
Toyo Spinning installed "kateiryo" called "jishuryo" in 1922. Sewing and Japanese-style cooking classes spread rapidly as a result of increased leisure time coming from the abolition of night work in 1929. In 1935 high schools for girls sponsored by companies such as Toyo High School were replaced by "youth school". The practice of "jishuryo" was more actively performed because the curriculum was consistent with the education principles of being a "good wife and smart mother".

研究分野：日本近代建築史

キーワード：寄宿舎　家庭寮　繊維工場　郡是製糸　東洋紡績

１．研究開始当初の背景

(1)近代的な工場寄宿舎は、明治中期以後、民間の繊維産業において労働力の集積の必要性から、若年女子労働者の居住施設として特に発展してきた。過酷な女子労働者の生活状況についての多くの記録から、工場寄宿舎には負のイメージが定着している。しかし、その実態は、地方や工場規模によって差があり、最近の研究から企業による特性もあることが明らかになっていた。たとえば、鐘淵紡績では職工の幸福増進を計るための厚生施設が備えられ、福利施設の中心は社宅よりも構内の寄宿舎にあった。倉敷紡績では明治後期に「分散式家族的寄宿舎」が建設された後、長期雇用を前提に社宅通勤主義を目指すという先駆的な試みが行われた。これらから、寄宿舎は職工社宅と相互に補完しあう関係として捉えられていた。しかし特殊な条件のもと非家族的集団で住生活を営むという居住形態は、本来従業員家族が住む社宅とは切り離して考察すべきであり、別の視点からのアプローチを検討する余地を残していた。

(2)明治後期には製糸業・紡績業の飛躍的な発展に伴い、労働力の安定的・効率的な確保という目的で、寄宿舎・社宅などの居住施設が急速に建設された。その際、製糸・紡績などの工場は若年女子労働者の就業率が高いため、労働効率の安定化や風紀上の目的から企業独自の教育制度を確立していた。工場構内には、一般の教科教育の他に、炊事や裁縫等の家政教育を行う学校や教室が設置され、一部の工場には年数を経た女子従業員が宿泊して家事を学ぶ家庭寮が設置された。また、郡是、鐘紡、倉紡は、キリスト教教育によって若年女子従業員を精神的に訓練した点が共通しており、寄宿舎は企業の教育制度を前提に形成されてきたといえる。

(3)家庭寮は、大正期から昭和戦前期にかけて帝国製麻株式会社（現帝国繊維(株)）、東洋紡績株式会社（現東洋紡(株)）、郡是製糸株式会社（現グンゼ(株)）、倉敷絹織株式会社（現クラレ(株)）に設置されていた。しかし家庭寮に関するこれまでの研究は、女子師範学校と高等女学校の他に官制の婦人団体の事業を対象としていて、繊維工場の社会教育に組み込まれた家庭寮の実態は、ほとんど知られていなかった。

２．研究の目的

(1)研究の全体構想は、近代における発展期の大規模繊維工場の形成過程を建築史学から解明することである。その中で本研究は、製糸・紡績等の繊維工場の女子寄宿舎と家庭寮及び教育関連施設について、その成立過程と配置・平面計画・設備等の充実過程や建築構成の特質を明らかにすることを目的とする。

(2)研究当初は、家庭寮を設置していた実績のある、帝國製麻、東洋紡績、郡是製糸、倉敷絹織を事例として取り上げる予定であったが、設計図や文献資料の保存状況から、対象事例を郡是製糸と東洋紡績に絞り、企業の社会教育制度と関連付けながら、工場法・工場付属寄宿舎規則等の当時の法律と社会的背景を踏まえつつ、企業ごとの特質を明らかにする。

３．研究の方法

(1)郡是製糸については、大正中頃から現代までの各工場の建築設計図（工場配置図、女子寮・女子寮事務所・家庭寮・教育関連施設の建物設計図等）や各種申請書類・竣工写真・絵葉書等が大量に残されている。それらを整理しながら、教育資料（沿革・教育制度・寄宿舎規則等の文献資料）及び工場の基本データ（従業員数・業態等）等を収集し、建物が残存する場合は現地調査を行い、遺構を写真撮影しながら図面資料と照合した。

研究当初は近代という時代の枠組みでの変遷過程を分析する予定であったが、家庭寮の多くが昭和 20(1945)年代以降に建設され

ていたため、戦後に操業した江南・宇都宮の各工場などをはじめ昭和 40(1965)年代建設のものも含めて資料を収集し、女子寮・家庭寮・女子寮事務所・学校（教室）等の配置・平面計画・構造形式について、年代順に平面計画や設備の充実過程を分析した。

なお、郡是では寄宿舎を寮と呼んでいたので本稿もそれに倣う。

(2)東洋紡績については、建築資料が乏しいため、工場と従業員の家庭との連絡を目的に発行された機関誌『東紡時報』『東洋家庭時報』に着目した。同誌は大正 11(1922)年から昭和 19(1944)年にかけて発行され、最盛期の同社の女子労働者の生活と寄宿舎の建築様式を知ることができる点で貴重な資料である。同誌に掲載された寄宿舎での生活と教育施設及びそれに連動した建築に関する記事を抽出して整理し、時代順に生活様式や建築設備等の変化について分析を行った。

(3)京丹後市の縮緬工場の調査は当初予定になかったが、昭和 2(1927)年の北丹後震災後の復興建築としての工場及び寄宿舎の現地調査にかかわったので、立地上その影響を受けたとみられる郡是製糸の寄宿舎の構造と比較検討を行った。

４．研究成果

(1)郡是製糸に関しては、本工場、江南工場、宇都宮工場、家庭寮（各工場）、郡是女学校（誠修学院）の 5 つに分けて成果を述べる。

①本工場では、明治 42(1909)年に教育部が発足し、大正初期頃までに最初の独立棟として教室が設置された。女子寮事務所棟にも教室が設置されたが、昭和 14(1939)年の改築で 1 階に作法室や割烹室が設けられ、2 階はほぼ教室となり教育施設が大幅に増床した。これは郡是青年学校の開設に伴う改築であったと推察された。

同社の女子寮舎は、大正末期（1925 年頃）に衛生と女性に配慮した標準プランが確立されていたが、第二次世界大戦後は寮運営の自治が謳われ、女子寮舎の平面プランも変化した。昭和 37(1962)、38(1963)年に新設された本工場の２棟の女子寮舎については、木造 2 階建てであるものの、水回りや階段室を RC 造にして防火壁と兼用していた。昭和 39(1964)年に RC 造の女子寮舎１棟が建てられ、水洗便所が各階に配置され、屋上には洗濯場や物干場が設置された。３棟とも寮室には床の間がなく、個人用物入・洋服入・布団入が壁面一杯に造り付けられた。着替え用のコーナーを設けた寮室もみられた。

②江南工場は昭和 33（1958）年に操業し、同社では最初の RC 造となる女子寮舎が建設された。RC 造の女子寮舎には、水洗化により便所が各階に配置され、屋上には洗濯場や物干場が設置された。しかし全体的な平面型は、北側片廊下に沿って 15 畳の寮室が並ぶもので戦前の木造寮舎の平面型を踏襲していた。また寮室の床の間は廃止されたが、同時期に建設された家庭寮には床の間が設置されたので、作法・割烹・生花等の教育が寮舎外の家庭寮で行われることを示唆していた。昭和 43（1968）年建設の階段室型の RC 造寮舎は、水廻りを 4 室が共有し、各室は 6～10 畳（2 室が連結して 16～18 畳）で構成され、1 人あたり 3 畳の面積が確保されるようになった。このような女子寮舎の大幅な改善は、当時の繊維業の労働組合組織が掲げた「寄宿舎対策指針」の影響を受けており、将来社宅への転用も視野に入れていたと考えられる。

③宇都宮工場はメリヤス製品の生産工場として栃木県の誘致により昭和 42（1967）年工業団地内に建設された。中央廊下を貫いて南向きに 4 棟の RC 造 3 階建て女子寮舎が中庭を挟んで建ち、うち 1～3 号棟は北側片廊下式であるが、4 号棟は階段室型で水廻りを 4 室が共有する型式である。女子寮舎の南端に女子寮事務所・家庭寮・割烹室・教室が並び、西側廊下を隔てて食堂・浴場・診療所・客室が配されている。現在この工場は物流センタ

ーに変更され、女子寮としては使用されていないが、当初の建物がほぼ完璧に残る。北側片廊下式の寮舎の中にはワンルーム型や水廻り共有型等に改装されたものがあり、平面計画に対する試行錯誤の跡が見られる。また家庭寮は昭和 49(1974)年に木造平屋建てで新築されていた。

④同社の家庭寮は、昭和 15(1940)年頃に青年学校に影響を受けて成立したもので当時はわずかしか設置されていなかった。多くは昭和 20(1945)年代以降に各工場に建設されており、本工場には昭和 23(1948)年に設置され、昭和 24(1949)年には郡是女学院（旧誠修学院）にも設置された。２寮とも幅１間の床の間と違い棚をもっていた。少人数が寝食を共にしながら家事や作法の実習体験ができる家庭寮を女子寮舎外に持つことにより、起居を通して行われた「郡是教育」は、女子寮舎内から家庭寮や教室へと移ったことを意味していた。

家庭寮は、昭和 30(1955)年代までは木造平屋建て瓦葺の和風住宅の外観をもち、続き間を基本とし、幅１間以上の床の間を設置していた。昭和 40(1965)年代になると家庭寮に調理場や割烹教室などの教室が付設され、付設しないものはＤＫや寝室（2 段ベッド付き）のある中流社宅の平面型となった。

⑤大正 6(1917)年に郡是女学校（大正 13(1924)年から誠修学院に改称）が開設し、女子寮舎 2 棟と教室棟 1 棟が建てられ、新人教育と教婦養成が行われた。研修用に繰糸工場や再繰工場等も建てられ、一つの小さな工場となっていた。

(2)東洋紡績に関しては、「自修寮」（同社では家庭寮のことをこう呼ぶ）での少人数の自炊生活、季節感のある寄宿舎や食堂での催し、衛生設備器具の進化、宗派別に分かれた寄宿舎での行事、関東大震災後の建物補強等、生活実感のある建築空間の様子を捉えることができた。

工場では、昭和 4(1929)年の深夜業廃止に伴う余暇時間の増加により、裁縫や割烹教室、運動施設等が一層充実した。女子従業員には仏教徒が多く、講堂には仏壇が置かれ、構内には神社や神殿も存在した。昭和 10(1935)年に工場付設の東洋実科女学校が青年学校に移行しても当時の良妻賢母主義教育と合致し、「自修寮」（家庭寮）実習もさらに活発に行われた。寄宿舎便所の水洗化、診療所のレントゲン室や太陽燈浴室の設置等、設備が充実化した。

香川県にある東洋紡績三本松工場は昭和 8(1933)年に完成した。平成 8(1996)年 5 月に同工場は帝國製薬に売却されたが、旧女子寄宿舎は、外壁を残して丁寧に補修され、現在研究所として使用されている。この建物以外に東洋紡績の寄宿舎は他に残されておらず、しかもここでは建物が群として元の配置のままで残っていることは貴重である。

(3)郡是製糸の女子寮舎の木造構法は、大正末頃まで筋違・火打材・金物が意識的に使われていたものの現場任せであった。大正末頃にそれらが図面上に具体的に示され、建設技術が一気に進化した。その背景には、大正 14(1925)年の北但馬地震の影響による耐震対策、市街地建築物法適用地域への分工場の新設、昭和 2(1927)年の寄宿舎取締規則に備えての安全・衛生対策がある。

(4)京丹後市域の縮緬工場 14 件を調査し、昭和 2(1927)年の北丹後震災後の復興策の影響を考慮しつつ、建築の特徴を分析・考察した。その結果、全ての工場が木造下見板張りであること、震災直後建設の工場には屋根材の軽量化がみられるが次第に瓦を使用するようになること、震災以降建設の工場の小屋組はトラス構造が大半を占め、火打梁・方杖・金物が採用されていること、採光優先のため壁量は極端に少ないことがわかった。

(5)本研究は、建築史の分野では手薄であった戦後の寄宿舎についても取り上げ、民主化

が急速に進展する中で建築構成がどのように変化を遂げたのかを明らかにすることで意義があったと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①山田智子、「郡是教育」と女子寮舎・教育施設・生活関連施設の建築構成―郡是製絲株式會社本工場と誠修学院を事例として―、京都文教短期大学研究紀要、査読無、54 巻、2016、69-79、
http://ci.nii.ac.jp/naid/110010016353

②山田智子、『東紡時報』『東洋家庭時報』にみる女子寄宿舎と教育施設における住生活と建築に関する記事（1928 年～1937 年)、京都文教短期大学研究紀要、査読無、52 巻、2014、171-181

③山田智子、『東紡時報』『東洋家庭時報』にみる女子寄宿舎と教育施設における住生活と建築に関する記事（1922 年～1928 年)、京都文教短期大学研究紀要、査読無、51 巻、2013、141-151

〔学会発表〕（計７件）

①山田智子、郡是製絲株式會社における女子寮舎の木構造について-近代製糸産業の形成過程に関する建築史研究その 15-、日本建築学会大会、2015.9.4-6、東海大学（神奈川県平塚市）

②山田智子、『東紡家庭時報』等にみる工場寄宿舎の住生活と建築-旧東洋紡績株式會社三本松工場（現帝國製薬）の事例と併せて-、日本建築学会四国支部研究発表会、2015.5.16、高知工科大学（高知県香美市）

③山田智子、京丹後市における縮緬工場の木構造の特徴について、日本建築学会大会、2014.9.12-14、神戸大学鶴甲第１キャンパス（兵庫県神戸市）

④山田智子、京丹後市における縮緬工場の木構造の特徴について、日本建築学会近畿支部研究発表会、2014.6.21-22、大阪工業技術専門学校（大阪府大阪市）

⑤山田智子、郡是製絲株式會社における女子寮舎の近代化過程－近代製糸産業の形成過程に関する建築史研究　その 14―、日本建築学会東海支部研究発表会、2014.2.17-18、名古屋大学（愛知県名古屋市）

⑥山田智子、郡是製絲株式會社における家庭寮の形成過程と建築構成－近代製糸産業の形成過程に関する建築史研究　その 13―、日本建築学会大会、2012.9.12-14、名古屋大学（愛知県名古屋市）

⑦山田智子、繊維工場における家庭寮の形成過程と建築構成－近代製糸産業の形成過程に関する建築史研究　その 12―、日本建築学会近畿支部研究発表会、2012.6.16-17、大阪工業技術専門学校（大阪府大阪市）

６．研究組織

(1)研究代表者

山田　智子（YAMADA, Tomoko）
京都文教短期大学・ライフデザイン学科・教授
研究者番号：６０３１０６３７